徳島新聞　平成２６年５月１０日（土）

健康

元気のヒント

<71>

徳島大学病院
呼吸器外科科長
先山　正二

手術が可能なら切除

転移性肺腫瘍

時期や効果 慎重に判断

肺は、全身を巡ってきた血液が二酸化炭素を吐き出して酸素を取り込む、呼吸に関して重要な働きをしている臓器です。

肺以外にできたがんから、がん細胞が血液やリンパ液の流れに乗って肺に運ばれ、肺でがん細胞が増えることを「肺に転移した」といい、肺そのものにできたがんである肺がん（原発性肺がん）と区別して転移性肺腫瘍と呼びます。「転移性肺がん」とはあまり呼びません。肺がんが肺の中で転移することもあります。

腫瘍と似た言葉に「腫瘤」があります。腫瘤は体にできた「こぶ」「丸っこい塊」や「しこり」を指します。

例えば胸のレントゲン写真を撮ったときに丸い影が映っていたとします。最初はその塊が何によるものか分からないので腫瘤と呼びます。原因としては悪性のできもの（悪性腫瘍）、良性のできもの（良性腫瘍）、肺炎や結核などの感染や炎症性の病変などが考えられます。

それでは、言葉の説明はここまでにして本題に入りましょう。いろいろながんが肺に転移を起こしますが、がんの種類によって肺への転移の仕方が異なります。肺に丸い塊をつくる転移性肺腫瘍には大腸がん、腎がん、甲状腺がんなどがあります。

胃がんや乳がんが、肺に転移を起こす場合には、塊ではなく、肺にもやもやとした影が現れたり、胸に水（胸水）がたまる形で現れたりします。

私たち呼吸器外科医が手術をする対象となる転移性肺腫瘍の多くは、塊をつくるタイプの大腸がんや腎がんです。甲状腺がんが肺に転移する場合は、それと同時に多数の転移が生じることが多いので、手術になる症例はより限られます。

転移性肺腫瘍に対して治療目的に手術を行う場合には、いくつかの条件があります。転移の元となったがん（原発巣）がうまく治療されているか、うまく治療できる見込みがある場合で、肺に転移した腫瘍の数が少なく、手術できる場所にあることなどです。もちろん肺の手術を受けられる体力があることはいうまでもありません。

手術は基本的には胸腔鏡による肺部分切除術です。肺に転移したがん（転移巣）を、切り取った近くでがんが再発しないように、がんのまわりに正常な肺をつけて切除します。ただし、転移巣が肺の深い場所にあったり、腫瘍が大きかったりした場合には、肺をより大きく切除せざる得ない場合もあります。

手術するタイミングですが、原発巣のがんに対して抗がん剤などの薬が使えるか、効果が期待できるかなどを判断して決定します。手術をした後は、胸部CT（コンピューター断層撮影）などで新たな転移巣が出現しないか経過を見ます。

治療は患者さんごとに、ご本人、原発巣の治療を行っている担当医と呼吸器外科医の間でよく相談した上で、手術の適応と時期を決めます。

（第2土曜に掲載）